

#### 第四項 將軍家の信仰

祐天隱居の翌年、享保元年四月三十日將軍家では家繼の薨去という事態を迎える。そして、八月十三日吉宗が將軍として宣下された（『有徳院殿御実記』以下『徳実記』）。

家繼の葬送は詮察大僧正のもと執行され、増上寺に埋葬された。この葬儀に関して詮察に銀二千枚、時服十、前大僧正門周に銀二百枚、前大僧正祐天に銀百枚が布施として授けられている（『徳実記』）。

一周忌の法会の際の布施は白随大僧正に銀千枚、門周と祐天の前大僧正に百枚となっている（『徳実記』享保二年四月二十九日）。

そして、享保三年四月家繼の三回忌を迎え、吉宗と祐天の対面が実現するのである。

当大將軍吉宗公殊<sup>トニシテキ</sup>命<sup>キ</sup>招<sup>ツ</sup>師於増上寺<sup>ニ</sup>「割注」方丈別殿<sup>リ</sup>有<sup>リ</sup>二面对<sup>ニ</sup>「慇懃降<sup>ニ</sup>」安<sup>ク</sup>慰<sup>ム</sup>之言<sup>一</sup>

（略記）

吉宗は將軍になるとき天英院の推薦を強く受けたことが『徳実記』（享保元年五月、一二頁）あるいは『元祿・享保の時代』（高埜利彦、日本の歴史十三、集英社、一九九二年、二五九頁）によって明らかにされている。吉宗は中納言時代から祐天とは接触していたこともあると考

えられ（『略記』によれば、日付は不明であるが吉宗が一本松にいた祐天に安陀衣一領を贈っている）、また天英院の影響も強く受けていることを考えれば、祐天に対するこのような計らいも、状況的には理解されるところである。

吉宗が縁山に参詣に行ったのは、法会の終わった晦日、文昭院殿の廟所への拝礼のためであった（『実録下書』完、『徳実記』）。

このときの布施は一周忌のときと同じであった（『徳実記』）。布施の額では將軍の心まで推し量ることはできないが、少なくとも祐天の法会へのかかわり方の指標にはなろう。

吉宗の治世となって、寺社の在り方も問われていく。その銚先は綱吉時代に全盛を極めた護持院護国寺に向けられた。この二か寺を合併し、観音堂をもって護国寺とすることが沙汰され、両院の寺領合わせ二千七百石をもって修理の費用を捻出することが求められた（『徳実記』享保二年三月十四日）。綱吉の遺産とも言うべきものが少しずつ整理されていったのである。このような中、徳川家の信仰を再び増上寺に戻した祐天の功績は再評価されねばならぬであろう。

#### 第五項 遷化

將軍と対面したあとの六月中旬、祐天の老衰はひどくなっていった（『略記』）。